

3.11からの2年と9カ月のこと

渡辺征治

2011年 3月11日 午後2時46分

片方の目尻が、ぴくぴくぴくっと麻痺した。地球を私たちの頭に置き換えたなら、東日本大震災とはその程度のことであったのだろう。あの津波は、痙攣に刺激されて目尻から流れ出た涙のひとしずく、くらいのことだったのかもしれない。あくまでも地球にとっては、である。目尻のしわの間に家を構え、集落やまちを築き、農地を開き、出張や旅行と言っては隣のしわやまつ毛の生え際や鼻の頭に移動するような私たちにとって、地球の麻痺はこの世界まるごとが終わる慟哭にも思えた。

揺れ始めはいわゆる初期微動。まあ常態化している三陸沖の小規模地震だろうと高をくくっていた（前々日にもちよい大きめの地震と、1メートルの津波を観測していたのだから）。続く横揺れは東西方向で、ああこれはけっこう大きめだと、その時点でもまだ大災厄になるとは思っていない。

が、次の瞬間からクルマのギアを1段抜かしてトップに入れたように、南北方向の揺れが加わった。もう自分は掌に載ったビー玉、ぐるんぐるんと円を描きもてあそばれ立つこともかなわない。8畳の自室でただノートパソコンを抱えて守りながらひたすらもまれ続けた。

「大きな揺れは長くても1分」のはずだね？ そうだよな!?……どこかの防災広報で聞いたことがある。誰だ、そんな呼びかけをしていた奴は。1分経とうと2分経とうと揺れは収まらない。ぽーん！と自室の押し入れが吹き飛んで、もろもろの生活道具がぶちまかる。頑丈なツーバイフォー材で自作した本棚がへし折れて本の雨がふってくる。後に5分から6分といわれる断続的な主要動が静まった時、書齋は見る影もないガラクタの海と化していた。

ものが散乱し床が傾いた廊下を駆け抜け、茶の間にいた父親の無事確かめる。停電でテレビは点かない。守ったノートパソコンを立ち上げると、気象庁のウェブサイトが震源、震度、そして津波警報がわかった。ツイッターに「無事です」とだけ書き込んだ後に、無線インターネットも沈黙。

わたなべ せいじ 1965年宮城県石巻市生まれ、在住。コメ農家兼・東北六県の農山漁村のなりわいを（都市とのつながりも視野におきながら）取材するフリーライター。

母親はどこへ出かけたのだろうか？と心配したその時、軽トラックで帰ってきた。農免道路の真ん中で揺れに遭遇し、切れて火花を上げる電線におののいたことを、母は目を丸めて語る。

外はどうか。玄関前の庭は地割れが走り、その先の木蔵が傾いている。絶えまない余震。14軒の集落は旧北上川の堤防に沿って並ぶ。誰もが堤防の路上に飛び出て、倒壊寸前にまで傾いた2軒隣から逃げ出してきた婆ちゃんが両手で顔を押しさえ涙していた。

およそ1時間後、石巻市街地の河口から13キロもさかのぼったこの場所に、黒い波が逆巻き上ってきた。寒が戻ったあの日、降りだしたぼた雪の中、無人の小型船をおもちゃのようにもてあそびながら。集落に達しなかったことは、幸運というほかない。忘れ得ないあの光景、あの時間。青森から茨城までの浜沿いで、数万人が海に呑み込まれ、流され、押しつぶされ、それでも生存をかけて戦っていたのかと思うと、どんな言葉も喉元からUターンして沈んでしまう。

被災地の農漁は、がんばっている

震災から1週間が経ちました。1カ月が経ちました。1年が過ぎようとしています。早くも2年です……福島第一原発の事故という深刻過ぎる「おまけ」までついた[3.11]を、私たちは時節を刻みながらこれからも思い返し、見つめていくのだろう。

太平洋側東北地方以外の人から、よく聞



長面近くの大川小学校



大川地区の決壊した堤防と農協倉庫



水没した大川地区

かれる。「復興は進んでいるのですか」。あるいはもっと返球のゾーンを広げて「石巻はどんな状況ですか」などと投げかけてくる人もいる。どのように答えたら良いのか、しばらくの間は迷っていた。最近は返答に、ある種のフォームができつつある。

「大丈夫ですよ」

これは私がこの15年というもの、雑誌や新聞紙上にレポートを続けてきた東北の農業と、同じく食を支える漁業についての見方である。もちろん足踏みしているところはある。地形が変わりすぎて回復が見込めない農地もある。細かく見ていけば地域により、その土地全体の生業により、企業により、地勢や水文の環境により、千差万別。大きく俯瞰する視点に立てば、震災前の数字と比肩するものはほとんどないと言っている。海産物でいったら、ワカメくらいなものだろう。これは収穫まで数カ月と速いため、再起を目指す漁師は2011年の秋からこぞって種付けを行ったからである。カキ養殖にいたっては「再生産に乗り出した漁師は、震災前の約半数、生産量は3分の1」と、地元の河北新報はこの10月に報じた。人口が流出して戻らないまちも多い。石巻のような中核都市の市街地はともかく、その周りの平成合併まで別の町だった地区では人口が半数～70%内外も流れ出ている。

しかし、数字が戻れば復興なのかと問わ



長面浦に残ったカキ養殖筏を手入れする鈴木光悦さん。2011年9月

れれば、そうではないだろう。不幸な、極めて大きなこの災厄を機会として、経営が成り立つ漁業や農業の形をさがしたり、地域のコミュニティを「紡ぎなおそう」と考えていたりする人たちは少なくない。むしろ動きが加速したとも言える。みんな、それでも海が好きだという人、土から離れられない人である。だから、自信と確信をもって私は言えるのだ。「大丈夫」と。

希望が見えない1年

震災から数カ月、いや1年というものは、とてもそんなおおらかな心持ちにはなれなかった。浜は、漁業はもう終わりだとさえ思った。スーパーの魚から慣れ親しんだ漁港の名が一斉に消えたのだから。農業だって広大な水田が津波に沈み、宮城の米はどれだけ生産が落ちるのかわからないと思った。他にもない私が住む集落の水田も、ちゃんと田植えができるかどうか、みな不安だった。土地改良区は揚排水施設の損壊を調べたが、水を通してみないと最終的にはわからないという。

いしのまき農協管内の石巻市と東松島市で冠水した水田は、約4,000ヘクタール。そのうちがれきなどが流れ込んでいない、なおかつ塩分濃度が一定以下以下の964ヘクタールで、除塩処理をしながら作付けが進められた。手順は水田を代かきし、土が沈殿したら排水。この作業を3回程度行ってから田植えに進む。2011年はほぼすべての除塩田で塩害は出ず、相応の実りを得た。しかし除塩田を一気に増やした昨年、石巻

市北東部の北上町で、除塩田の稲が8月に突然稲が赤くしおれた。少雨で北上川の水位が下がり、追波湾（おっぱわん）から海水がポンプ場まで上ってきたのである。その異変に誰も気がつかなかった。

ここ追波湾周辺は、私の家から最も近い海だ。海水浴、シジミ搔きなどいくつもの



塩害が発生した除塩田。2012年8月



除塩田に作付した石巻市北上町の大内弘さん。受託も含め45ヘクタールを個人で経営する

原体験がある。震災から一週間目、ここへ足を運び目にした変わり様は忘れえない。ラジオの震災情報は絶望的な状況ばかりで、その向こうに親しいいくつもの顔が浮かんでくる。カキを育てる漁協組合長Oさん。シラウオやカレイなど季節の魚を追いかけるHさん。仙台の雑煮に欠かせないだし素材である焼きハゼを作る名人、Sさん。[3.11]のほんの10日前、養殖ワカメの収穫船に乗せてくれたYさん。そして北上川の広大なヨシ原で、茅葺屋根用のヨシを刈っている屋根工事会社の友人K……。

ガソリンは貴重なので、節約したい。双眼鏡と一応はカメラを持ち、自転車をこぐ。河口から10kmの土手に出たところで、河川敷はすでに泥であふれ、20メートルもある松の木が根こそぎ、ごろごろと転がっていた。高さ6メートルの堤防を津波が越えた跡があり、あちこち崩壊が口をあけ地割れが走る。白黒の毛布が落ちている、と思ったら乳牛の亡骸。大きな澄んだ目の内には、どんな光も宿していない。堤防で隔てられた水田は湖のようで、お寺や酪農家の牛舎が孤立している。耳を澄ませば、牛たちの叫び声がする。おそらく体が水に浸かっているのだろう。誰か、誰かあそこまで行って餌をあげられないのか。

集落がまるごとなくなっている。家が、ビルほどもある水門の鋼鉄扉がコンクリートの枠ごと転がっている。何をどうすればこのような破壊ができるのか。河口の白波が見えるところまでで、一般人が近づける道は途絶えた。川を挟んで対岸には、尾ノ

崎、長面（ながづら）という浜が見える。手前に見えるはずの堤防が消え、約300ヘクタールの広大な水田も海の一部だった。自衛隊のヘリコプターが何度も往復する。双眼鏡をのぞいていると、太い嗚咽がのどを上ってくる気配を感じた。泣くな。自分にはそんな資格すらない。家は倒壊を免れたし、命まで脅かされたわけではない（紙一重とは思うけれど）。結果的には幸運な安全圏だった場所から来て、そこへ帰っていく身であり、何の力にもなれない。誰かに会えたらと思って出てきたのに、どこか



水没した水田。石巻市北上町



孤立した乳牛舎から牛たちの叫び声が聞こえた

で会うことを怖がりながら、誰にも会えずに自宅へ帰った。

与えられた仕事—再起の報告

自転車をこいで自宅に帰り着いた日の夕刻。JAグループの機関誌「家の光」編集局から安否の確認と、執筆の依頼があった。この震災で目にしたこと、思ったことを一人語りでの報告するスタイルだったので、特段の難しさはなかった。自分以外の農家とJAについての取材記事を依頼されたのは、田植えを目前に控えたその後の5月。農山漁村文化協会「季刊地域」から、「岩手県で協業化により再起を図る漁協を取材してくれませんか」という打診も届いた。ある意味、私自身が日常へと戻るきっかけを頂いたと言えなくもない。職能を買ってもらえていることは、まことにもってありがたい限りだ。けれど私は迷いがあった。震災以前のような取材ができるだろうか。

住まいや農地や船を、家族さえ失った人の元へ行って、どんな言葉をかければいいのか。「いまのお気持ちは」……殴られても文句は言えない質問ではないか。文章書きの仕事を25年ばかり続けてきた中で、これは最もむずかしいミッションかもしれない。特に、地元石巻での取材は怖い。私自身を、私の父や母を、震災以前から知っている。「あそこの息子が取材に来た」と言われる怖さだ。そんな足元をたずね、現状をレポートする依頼は、まもなく舞い込んだ。新聞社から「長面の今を伝えてほしい」と。

取材地の長面浦は、その緒のような細い水路で追波湾とつながった、山上の湖のように波静かな内海だ。周りを囲むように2つの集落が寄り添う。ここでは春先に種ガキを海中に吊ると、他の湾では1年半かかるのに、10月には食べごろに育つ。外洋と浦とを結ぶ水路（滞＝みおと呼ぶ）の底からは、養殖でない完全天然のカキも採れる。偽りも誇張もない、稀有な豊穡の浦だ。そして、ここの漁師たちは皆、トラクターや田植機を持っていた。ここほど農と漁がいっしょにとけあった「半農半漁」の浜を私は知らない。

逃げていいのかという自問もまちがいに存在する、複雑な心境。腹をくくって、どこか断罪を受けるような覚悟で、彼の地を踏んだ。変わり果てた浜で、魚ではなく、がれきを拾い集めて日当を稼ぐ漁師たちの中に、ずいぶんお世話になったお顔を2人見つけた。

「おー、ワタナベさん。生きてたか。梨の木（集落）、流されてしまったんじゃないかって思ったよ」

まるで立場が逆のような第一声をもらい、腰から下の力が抜けて座り込んでしまいそうだった。ごめんなさい。申し訳ない。こういう訪ね方しかできない自分を、どうか許してください。なおもここで生きようとする皆さんを心から尊敬します。せめて

その姿を伝え、支援に替えたいと思った。

もう迷いが無いかと問われれば、まだある。伝える仕事は大切だけれども、それを傘に振る舞う横柄なことは絶対に禁じよう。そして話を聞かせてくださる人がいる限りどこへでも出かけたい。ふつうにたずね、ふつうに声をかけよう。そんな思いで、報告の旅は走りだした。

いまの心配をあえて上げるなら、収束が見通せない福島第一原発事故が、この国の根幹を（経済だけでなく自然環境や国際的な信頼までも）崩壊させかねないこと。一時に比べ、報道が少なくなっているが、最も注視しなければならないと思う。

石巻だけではない。岩手のリアス式海岸の浦々で、仙台周辺の広大な田園で、福島の温暖な光に満ちた浜で。農漁は負けない。



壊滅した長面集落で今年初めて神社のお祭りが再び催された。神輿と踊りが繰り出し、ふるさとを讃える